

## 『野鳥録音で広がる世界』

公益財団法人 日本野鳥の会理事 松田道生

野鳥録音に行くと、よく「えっ、これだけなんですか?」といわれます。私の愛用の録音機は、システム手帳程度の大きさしかありません。泊まりの取材旅行では、より小型の機種を含めて4、5台持って行きますが、衣服を含めてもリュックひとつ。日帰りならば、録音の装備はウエストポーチに入れていきます。昔を知っている方は、野鳥録音という大きなパラボラを持って来るものと思っているのですから、あまりの装備の少なさに驚くことになります。



かつてのカセットテープでは、高い音は8,000Hzまで。Hz（ヘルツ）は周波数、1秒間に何回振幅があるかで、数字が大きいほど高い音となります。ですから、8,000Hzに音の中心のあるヤブサメの声はろくに録れません。現在は、メモリーに記録する方法で3倍の24,000Hzは当たり前、機種によっては6倍の48,000Hzまで録音できます。人の耳は若い人で20,000Hzまでと言われていたから、聞こえない領域まで録音できることになります。この高品位で録音すると、シジュウカラは人には聞こえない高い音で鳴いていることがわかり、夜の水辺はコウモリがたくさん鳴きながら飛んでいることがわかります。

このほか、単三電池1本で数十時間録音ができる機種では、大容量のメモリーと合わせて1日とか一晩中という録音の仕方ができます。さらに、タイマー機能の付いた録音機であれば、さえずりのピークの午前3時～5時という設定をして、日曜日に山の中に置いて次の日曜日に回収するということができます。

基本、録音機にはマイクも付いていて、1台で完結していることになります。ですから、鳴いている鳥がいたら置いてそっと離れる、あるいはソングポストを見つけたら長時間置くという録音の仕方となり、鳥に影響を与えることの少ない方法をとることができます。加えて、かつての音の編集はスタジオが必要でした。しかし、今ではコンピュータにスピーカーを接続すればOKです。編集ソフトは、録音機におまけに付いているものから無料で公開されているものまであり、自在に編集加工をすることができます。お気に入りの野鳥の声が録れたら、CDに焼いてプレゼントをしたり、サイトにアップ、携帯電話の着信音にするなど、楽しみ方はいろいろです。こうした環境が整ったのはここ5年ほど。はじめのは今です。

野鳥を録音していて「鳥は、よく鳴く」生き物だと思います。姿の見えない森の中では、音によるコミュニケーションがとても有効だからです。シジュウカラの仲間はたえず鳴き合っています。オオルリやクログミは30分間さえずり続けます。たとえば、録音をするときに30分聞き、家に帰ってきて編集するのに30分以上、CDを作って確認のために30分聞いたなら嫌でも鳥の声を覚えます。野鳥の声を覚えるいちばんのコツは、野鳥を録音することだと思います。

録音していて気がついたのは、姿の見えない鳥ほどよく鳴くことです。たとえば、夜に鳴くフクロウ類は、個体識別が可能です。亜種エゾフクロウは、本州のものと鳴き声が異なるのでDNAを調べたら別種ほど違っていたことがわかりました。ヨシで生活をしているクイナ類は、姿は見せませんがよく鳴いてくれます。暮れから正月にかけて遊水池で録音をしたらヒクイナの警戒の声が入っていました。このほかにも、冬の記録を仲間から報告を受けており留鳥説をとなえています。また、クイナの声がわかると小規模のヨシ原からも聞こえて来ることがあり、どこにでもいる印象があります。目で見ている野鳥観察とは、違った鳥たちの素顔を野鳥録音から知ることができます。

『野鳥』誌に連載した「野鳥の声を聴く楽しみ」は、下記URLですべて読むことができます。

[http://www.birdfan.net/fun/matsuda\\_song/index.html](http://www.birdfan.net/fun/matsuda_song/index.html)

松田道生の録音の話題が中心のsyrinx ブログ編

<http://syrinxmm.cocolog-nifty.com/syrinx/>